

国際協力特別賞

自分の目で見て発信すること

昭和薬科大学附属高等学校 1年

上間 涼音

「本当の幸せとは何だろう。今まで私はどんなに恵まれていたのだろうか。」私はこの夏、初めてこんな事を考える機会を得た。

そのきっかけは、スタディーツアーで行ったカンボジアでの経験である。以前から、発展途上国や国際協力に興味があった私は、実際に行くまでは「どんな事をすればカンボジアの人達の役に立つのだろうか。孤児院に行ったら何を話しかけ、教えてらいいのだろうか。親がいないという事は暗くて静かな子が多いのではないだろうか。」と誰かの為に何かができるという期待と、勝手にいろいろな事を想像して初めての海外への不安があった。募金や寄付、そして技術などを教える事が国際協力だと思っていた私は、カンボジアの事をあまり知らないのにも関わらず、何かをしてあげよう、教えてあげようという気持ちが強かった。しかし、その考えは実際に目で見る事で、あまりにも無知で自分本位だと痛感した。

私と同年代の子達が、家があまり裕福でなく学校に通えず、家族のために働く職場を見学に行った。そこは、日本人がカンボジア人の女性達のために職を与えようという思いから生まれた場所で、仕事だけでなく普段の生活もサポートしているようだった。食堂を案内される時に、日本人ガイドの方から「彼女達は、ここで働くまでご飯を 3 食食べるという事を知らなかった。だから、そういう事から教えている。」という話を聞き、私は驚きを隠せなかった。小さい頃から 3 食を当たり前のように食べてきた私の想像をはるかに超えていて、心が痛くなった。

そこで働いている私より一つ年上の女の子に、将来の夢や一番楽しい事などいくつか質問すると、とてもきれいな眼で「家族が一番大事。家族と一緒にいればそれでいい。」など自分の事よりも家族の幸せを何よりも願っていた。もし私だったら、全て自己中心的な回答をしてしまう事に恥ずかしく情けない気持ちになった。その子は、小 2 で学校を辞め家事をし去年から働き始めた。私は、私立の中学と高校に通い、塾や習い事など自分の好きな事もでき、欲しい時に欲しい物が買えるという生活が特別な事だと感じた事は無かった。感謝と平和という言葉が、私の心と頭を巡り、今後私の人生で忘れてならないと強く感じた。

初めての事ばかりでどれも衝撃を受けたが、その中で最も印象に残った事は、カンボジア

の人達のキラキラ輝く笑顔だった。学校に通わず働いている女の子達も、親が近くにいない子供達も、もちろん大変で辛い事はたくさんあると思うがそれを感じさせないくらいの笑顔で接してくれた。孤児院には、親がカンボジアに職がなく遠くへ働きに行かざるをえないため、預けられた子がほとんどだ。施設に入るとすぐに、子供達が私の手を引き、一緒に遊ぼう、施設を案内するよと人懐っこい笑顔で迎えてくれ、どのように仲良くなろう、何を話そうという不安は一気に消え、私まで自然と笑顔になることができた。

この夏、私はカンボジアに行きたくさんの笑顔やパワーをもらい、自分のこれまでの生活や幸せについて考えることができた。お金がたくさんあり欲しい物が手に入る人、学校に通ってはいないが大好きな家族がいる人、近くに両親はいないが大学まで通える人、私にはどの人生が幸せなのかは分からない。世界には様々な人がいて、幸せの在り方はそれぞれだ。

もちろん医療や農業など優れた技術を伝える事が途上国の進歩に繋がるのは言うまでもない。しかし、今の私に出来る事は自分の目で世界の現状を知り、自分の生活を見つめ直し、現地のリアルな姿や感じた事を自らの言葉で発信していく事ではないだろうか。

カンボジアで感じ学んだ事を無駄にせず、更に視野を広げ、未来の地球の為に出来る事を考え発信できる存在でありたい。